

一般病棟看護者を対象とした公開講座「認知症看護」の評価と今後の課題

山崎 智子, 小楠 範子, 木村 孝子

要 旨

本稿の目的は、本学で行った一般病棟看護者を対象とした公開講座「認知症看護」(以下、公開講座)の評価と課題を明らかにすることである。

研究参加者は、平成 24 年度の公開講座参加者のうち、研究への協力が得られた 38 名である。公開講座終了時に、アンケート調査を行い、分析を行った。

分析の結果、前半の講義に対して全員が「よかった」と評価し、後半の事例検討会には「有意義だった」と評価した。

公開講座の内容は、認知症に関する基礎知識を主とした講義と事例検討会であった。これは、認知症の基本的な知識をふまえつつ、実際の看護場面を振り返る好機ともなり、参加者の満足につながったと考えられた。

今後は、認知症の基本的な知識をふまえつつ、臨床でその知識を使ったアセスメント、看護実践へとつながるような公開講座のあり方を検討していく必要がある。

キーワード：認知症看護，一般病棟，看護者

I. はじめに

本学は、平成 19 年度に「認知症教育を通した人づくり・町づくり - いのちの尊厳に溢れた、やさしさの網の目づくりを目指して - 」という取り組みが、現代的教育ニーズ取り組み支援プログラムに採択されており¹⁾、認知症の理解を目指して大学生やこどもを対象に認知症教育を行っている²⁾³⁾⁴⁾。

本学が位置する鹿児島県は高齢化率全国 12 位⁵⁾であるが、平成 20 年度に鹿児島県下の病院と施設に対して行った認定看護師制度に関する調査⁶⁾では、ニーズが高い認定看護師の分野として「認知症看護」もあげられた。高齢化に伴い認知症をもつ高齢者の割合も増え、臨床現場では認知症看護のあり方を模索している状態といえるだろう。このような臨床現場のニーズを踏まえ、本学では、平成 23 年度より認知症教育の対象を看護者にも広げ、公開講座「認知症看護」(以下、公開講座)を開催している。

平成 24 年度は、平成 23 年度の公開講座の際に参加者の意見としてあげられた「急性期の認知症ケアについてもとりあげて欲しい」⁷⁾という声を受け、鹿児島県看護協会川薩地区の協力を得て、実際の臨床現場で起きている事例を題材としてとりあげ、講義と事例検討会の形式で公開講座を開催した。

本稿の目的は、本学で行った一般病棟看護者を対象と

した公開講座がどのように参加者に評価されたかを明らかにすることである。さらに、その評価をもとに今後の公開講座のあり方を検討する。

II. 研究方法

1. 研究参加者

平成 24 年度に本学にて企画した公開講座の参加者のうち研究への同意が得られた 38 名である。

2. データ収集方法および分析方法

公開講座終了後に評価や感想を問うアンケート調査を行った。調査内容は、項目ごとに分析を行い、自由記述については意味のまとまりごとに質的帰納的に分析を行った。

3. 倫理的配慮

研究参加者には、研究目的と方法、研究参加への自由意思の尊重、プライバシーの保護等を口頭と文書で説明し、アンケート用紙の提出をもって研究参加への同意とみなした。事例検討会用の事例は個人が特定される情報を全て削除して再構成したものをを用い、事例検討会が終了した時点で即回収し、シュレッダー処理を行った。

4. 用語の定義

本研究では、「看護者」と「一般病棟」、「認知症の方の本人目線」を以下のように定義した。

1) 看護者

看護者とは、看護師、准看護師のことである。

2) 一般病棟

一般病棟とは、認知症の治療・看護が専門ではない職場をさしている。

3) 認知症の方の本人目線

認知症の方の本人目線とは、認知症当事者を主体にしたものの見え方をさしている。

Ⅲ. 公開講座の概要

公開講座は、講義と事例検討会の形式で行った。講義の内容は、認知症の歴史、病態生理、中核症状、行動・心理症状 (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia ; 以下 BPSD)、コミュニケーションの方法等である。事例検討会は、実際に一般病棟で生じた認知症患者との看護場面を題材にした事例を基にグループワークを行った。この事例は、一般病棟の看護者が、認知症患者の入院から退院に至るまで看護に困難を抱え続け、不快感が残ったという内容だった。事例検討会においては、5つの目標 (表1) を掲げ、目標が達成できたかどうかはアンケート調査によって確認した。

表1 事例検討会の5つの目標

- | |
|---|
| ① 認知症の中核症状のとらえ方が理解できる。
② 認知症の中核症状を把握することの重要性が理解できる。
③ 「認知症の方の本人目線」で考えることの重要性が理解できる。
④ 医療者のものの見方と、認知症の方のものの見方にはズレがあることが理解できる。
⑤ 認知症の中核症状は改善できなくても、BPSDは、関わり方次第では多少軽減できる可能性があることを理解できる。 |
|---|

Ⅳ. 結 果

1. 公開講座の参加者の特徴

- 1) 公開講座の講義の参加者は38名、そのうち事例検討会に続けて参加した者は31名だった。
- 2) 看護者の内訳は、看護師34名、准看護師4名だった。
- 3) 参加者の年齢層は、30代と50代が各10名、40代が9名、20代が8名、60代が1名だった。

2. 公開講座「認知症看護」の評価

1) 公開講座 (講義) の内容の評価

講義の内容については、「よかった」が18名 (47%) と最も多く、「大変よかった」が16名 (42%)、「別の内容がよかった」が0名、無回答が4名 (11%) であった。認知症という疾患や認知症の方への対応の仕方、認知症の方の思い、認知症の方の尊厳等について理解できたことが「よかった」と評価した理

由であった。

2) 事例検討会の評価

他施設メンバーとグループを作り、意見交換しながら事例検討を行ったことに対して、「大変有意義だった」は17名 (55%)、「有意義だった」は14名 (45%) と回答者全員が有意義だったと答えた。

事例検討会の5つの目標 (表1) 対して「とてもそう思う」という回答が得られたのは次のとおりであった。①「事例検討会を通して、認知症の中核症状のとらえ方が理解できた」10名 (32%)、②「事例検討会を通して、認知症の中核症状を把握することの重要性が理解できた」14名 (45%)、③「事例検討会を通して、“認知症の方の本人目線”で考えることの重要性が理解できた」20名 (65%)、④「事例検討会を通して、医療者のものの見方と、認知症の方のものの見方にはズレがあることが理解できた」22名 (71%)、⑤「事例検討会を通して、認知症の中核症状は改善できなくても、BPSDは関わり方次第では多少軽減できる可能性があることが理解できた」12名 (39%) だった。

3) 事例検討会に参加した感想

事例検討会に参加した感想 (自由記述) を分析したところ、＜意見交換できた満足感＞、＜客観的に検討できたことの評価＞、＜「みんな同じ」という気づき＞、＜日頃の自分の看護の振り返り＞、＜学習できたことへの満足感＞、＜今後の認知症看護への意欲の向上＞、＜理想と現実の狭間でのジレンマ＞の7つのカテゴリーに分類された。それぞれのカテゴリーの内容は次のとおりである。

＜意見交換できた満足感＞は、事例を介して、他施設の状況や認知症ケアへの取り組みの実際、認知症ケアの個々人の考え方などを意見交換できたことへの満足感を示していた。＜客観的に検討できたことの評価＞は、事例で示された看護場面を第三者の視点で客観的に見ることにより、看護現場で患者と向き合っている時には見えなかった新たな気づきがあったことへの評価であった。＜「みんな同じ」という気づき＞は、認知症患者を看護する上で日頃自らが抱えていた課題や困難さが、自分だけのものではなく「みんな同じ」だという気づきを得ていることを示していた。＜日頃の自分の看護の振り返り＞は、事例を介した意見交換が、日頃の自分の看護を振り返る機会となっており、患者よりも業務中心になっていたことへの反省も含むものだった。＜学習できたことへの満足感＞は、実際に看護現場で起きている状況を事例化して検討したことで、事例を自分のこととしてとらえやすく、実際の看護場面に生かせる視点を学べたことへの満足感を示していた。＜今

後の認知症看護への意欲の向上は、事例検討会での学びが「職場で生かせる」あるいは「生かしていきたい」という思いを引き起こし、今後の認知症看護への意欲の向上につながったことを示していた。＜理想と現実の狭間でのジレンマ＞は、事例検討会での学びを評価しつつも、認知症看護の質向上のためには、認知症看護に対するチーム内での共通理解やハード面での工夫も不可欠であることも実感し、理想と現実の狭間でのジレンマが生じていることを示していた。

4) 公開講座の参加動機

主な参加動機（複数回答可）は、「認知症ケアに関する知識を得たかった」が28名、「認知症の知識を得たかった」と「認知症の方のケアに戸惑いを感じていた」が各14名、「病院研修の一環」7名、「事例検討会で他施設の情報を得たかった」6名、「認知症の方の家族のケアに戸惑いを感じていたから」1名だった。

5) 今後の希望

「今後も認知症ケアに関する講座を希望するか」に対して34名（89%）の参加者が希望すると回答しており、4名（11%）が無回答だった。希望する講座の内容（複数回答可）は、「認知症の方の家族のケア」27名、「認知症ケアの基本」14名、「認知症の方が利用できる社会資源」と「認知症と薬」各13名、「事例検討」11名、「認知症の基礎知識」9名、「認知症とせん妄の違い」4名、その他（認知症が疑われる方や家族への受診のすすめ方）1名であった。

V. 考 察

1. 認知症看護に関する基礎教育の変化

参加者には、認知症や認知症ケアに関する知識を得たいというニーズがあり、講義の内容を評価していた。この結果は、ここ数年で認知症看護の基本的考え方に大きな変化があったことが影響していると考えられる。

看護系のテキストのひとつである医学書院出版の「系統看護学講座老年看護学」で、認知症や認知症看護に関する内容について確認してみると以下のように変化していた。

2005年発行の第6版⁸⁾は、認知症の中核症状とBPSDという言葉を紹介してはいるが、看護において症状を区別して考える重要性を述べるまでには至っていない。徘徊の解説においても、無秩序に歩きまわる徘徊は、中等度から高度へと重症化するにつれて増加する傾向がみられるので、脳障害の進行との関連を無視できず、徘徊の原因は、はっきりしたことはわからないとある。

2010年発行の第7版⁹⁾には、中核症状とBPSDと区別し、それぞれの具体的症状の説明が加えられている。さ

らにBPSDへの対応の基本は、認知症高齢者が安心・納得できる支援であり、認知症高齢者の目線で理解を深めることの重要性を述べている。徘徊についても、認知症高齢者からすれば、目的があるかもしれないと述べ、徘徊にいたる要因に中核症状や生理的欲求・身体的苦痛・不安・生活歴等が考えられることを示している。

認知症の治療や認知症看護を専門に行っていない一般病棟の看護者にとって、この新しい認知症の考え方が浸透していなくても不思議ではない。認知症患者の看護に関する知識は、各看護雑誌等で特集¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾を組まれ現在広がりつつあるものの、まだまだ体系化されているとは言い難い状況である。

今回の公開講座の参加者の年齢をみてもほとんどが30代以上であったことから、講義の内容は新しい知見であったと考えられ、このことが高い評価につながったと考えられる。

2. 「認知症の方の本人目線」への変換

事例検討会の目標は、認知症の中核症状とBPSDを分けて捉え、中核症状を踏まえて「認知症の方の本人目線」で考えると、看護者目線から見えてくるものとズレがあることを理解することであった。看護者目線で行った看護が認知症患者にとってどんな意味に受け止められたかを想像することで実施したケアがよい結果につながらなかった理由が理解できるのではないかと考えたためである。認知症のとらえ方でも述べたが、認知症の主症状はBPSDのように思われがちであるが、BPSDは中核症状を基礎として、環境や身体の変化、ケアの要因によって出現するのである¹³⁾。

今までの認知症医療や看護はしばしば、「認知症の方の本人目線」ではなく、家族や介護者の周囲の人の目線から構築されたものであり、そのことがさまざまな問題の原因になっていることも多い¹⁴⁾。したがって認知症の医療やケアでよい結果を出すためには、具体的な方法を考える前に、遠回りのようだが医療者の視点を見つめ直して¹⁴⁾「認知症の方の本人目線」で考えることが必要である。

事例検討を通して、以上の内容が理解できたことから事例検討会を有意義だったと評価したのではないかと考えられる。

3. 事例選択時の工夫

事例は、実際に病棟で看護者が困難と感じた認知症患者とのかかわりであったこと、看護者が困難と感じた場面を詳しく整理してあったことが、参加者の体験と重なりやすく、意見交換しやすくなったと考えられる。認知症高齢者の権利や看護倫理に関しては十分承知しているつもりでも、拘束という方法しか取れない現状やよい結果につながらない残念な思いにも共感でき、事例検討会に真剣に参加したことが満足できた理由となったと考え

られる。

4. 認知症ケアの困難さと看護者のストレス

一般病棟の認知症患者は、認知症以外の健康障害の治療目的で入院する。一般病棟の看護者は、認知症看護がメインではない状況で、患者のことを考えて認知症看護に真剣に取り組んでいるが、なかなかよい結果に結びつかない。認知症以外の治療をしながらの認知症看護は、看護者にとって困難と認識され、いらだちやあきらめ、葛藤などの感情を抱きやすい¹⁵⁾。そのため事例検討会の中で「他施設の人との意見交換ができたこと」や「みんな同じなんだと思えたこと」でどこか救われる思いがあったのではないだろうか。事例の話にこだわらず職場の話、自分たちが困っていることを徹底して出し合うことは、自分の置かれた状況を客観視するために必要なプロセスであり¹⁶⁾、ケアを見直すために必要である。

5. 今後、求められる認知症の公開講座の内容

今回の公開講座は、講義と事例検討会で構成したが、講義については、認知症やその看護に関する新しい知見を一般病棟の看護者に伝えていくためにも継続していく必要があると思われる。講義の内容については、参加者の要望を参考にしながら、認知症医療に詳しい医師による薬剤に関する講演や認知症家族による講演等も考慮していく必要があるだろう。

事例検討会については、今回は、事例検討会の目標であった「③“認知症の方の本人目線”で考えることの重要性が理解できた」と「④医療者のものの見方と、認知症の方のものの見方にはズレがあることが理解できた」に対して参加者の6～7割が「とてもそう思う」と回答しているため、認知症患者の目線への変換の重要性は理解しやすい事例検討会だったと評価できる。困難を感じた看護場面を「認知症の方の本人目線」でとらえ直してみることで、看護の内容が変わる可能性はあるため、今後もこのような事例検討会を継続していく意義はあるだろう。しかし、「①中核症状の捉え方が理解できた」、「②中核症状を把握することの重要性が理解できた」、「③認知症の中核症状は改善できなくても、BPSDは、関わり方次第では多少軽減できる可能性があることが理解できた」は、「とてもそう思う」と回答したのは参加者の3～4割程度だった。したがって、今回の事例検討会では、目標の①②③については、十分達成されたとはいえない。今後は、中核症状とBPSDを整理するプロセスを含んだ事例検討会にすることも考えていく必要がある。また、関わり方次第でBPSDは、軽減する可能性があることを理解するためには、実際の関わりによって認知症患者のBPSDが軽減した事例を題材にすることも効果的であろう。実際に認知症患者に関わっている実践者の体験談や認知症ケア専門士等を交えての事例検討会は、一般病棟の看護者の認識と行動に変化をもたらしたとの報告もあ

る¹⁶⁾ため、今後の公開講座の展開においては、認知症認定看護師や認知症ケア専門士などとの連携協力も必要と思われる。

VI. 結 論

本学で行った一般病棟看護者を対象とした公開講座の評価と課題を明らかにすることを目的に研究を行ったところ、前半の講義に対して全員が「よかった」と評価し、後半の事例検討会には「有意義だった」と評価していることが明らかとなった。

認知症医療や看護のあり方は、ここ数年で大きく変化しており、看護教育の内容もそれに合わせて変化している。従来の認知症医療や看護のあり方とは異なる新しい知見を公開講座を通して得られたことが、高い評価につながったと考えられた。

今後の課題は、中核症状を理解するとともに「認知症の方の本人目線」で言動の意味を考えていく思考を身につけられるような公開講座を企画することである。また、関わり方次第でBPSDは軽減する可能性があるということが理解できるような内容の検討も必要である。そのため、専門的に認知症ケアに携わる方々との連携も重要である。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、38名という少人数を対象とした、一回のみの公開講座から導き出された結果であり、一般病棟の看護者を対象とした認知症看護に関する公開講座のあり方を十分検討できたとはいえない。今後も公開講座の回数を重ねながら、その都度参加者に評価してもらい、一般病棟の看護者のニーズに応じた認知症看護の公開講座のあり方を検討する必要がある。

謝 辞

研究にご協力いただいた研究参加者の皆様に心よりお礼を申し上げます。

文 献

- 1) 文部科学省 平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定結果について (報告)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/07/07072005.htm
- 2) 木村孝子: 認知症を取り巻く現状から; 認知症サポーターの必要性. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 12: 1-7, 2008
- 3) 木村孝子, 小楠範子, 徳永龍子: 認知症サポーター育成プログラム 第一報. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 13: 1-6, 2009
- 4) 小楠範子, 木村孝子, 徳永龍子: 認知症サポーター育成プログラム 第二報. 鹿児島純心女子大学看護栄養

- 養学部紀要 14 : 77-81, 2010
- 5) <http://www.pref.kagoshima.jp/ae05/kenko-fukushi/koreisya/koreika/koureikaritu.htm>
 - 6) 山下美穂, 小湊博美, 花井節子, 上原充世, 高平百合子 : 認定看護師制度に関する調査. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 14 : 98-102, 2010
 - 7) 健康科学センター報 第2号 2012年10月
 - 8) 中島紀恵子, 山田律子, 北川公子 : 第10章 認知症高齢者の看護. 著者代表中島紀恵子 : 系統看護学講座専門20 老年看護学. 第6版, 医学書院, 東京, 2007, 244-284
 - 9) 北川公子, 山田律子 : 認知機能の障害に対する看護ケア③認知症. 著者代表北川公子 : 系統看護学講座専門分野Ⅱ 老年看護学. 第7版, 医学書院, 東京, 2010, 277-295
 - 10) 唐澤千登勢 (監修) : 認定看護師から事例で学ぶ認知症患者への対応方法. Nursing Today 25 (7) : 17-47
 - 2010
 - 11) 木之下徹, 西山みどり, 高原昭 : 特集認知症で困らないBPSD (認知症周辺症状) ケアの新機軸. 看護学雑誌 74 (4) : 6-34 2010
 - 12) 島橋誠 (監修) : 一般病棟の認知症患者 日常生活と療養を支える. Nursing Today 27 (1) : 9-54, 2012
 - 13) 六角僚子 : 認知症の中核症状の理解とケア. 看護技術 58 (6) : 12-15, 2012
 - 14) 木之下徹 : インタビュー視点で変わる認知症の医療ケア. 看護学雑誌 74 (4) : 6-15, 2010
 - 15) 乙村優, 徳川早知子 : 一般病棟で認知症高齢者とかかわる看護師の困難. 日本精神科看護学会誌 54 (3) : 114-118, 2011
 - 16) 渡辺真由美, 田口里美, 野村美由紀, 堀井範子 : 一般病院における認知症ケアの取り組み - 研修会開催による看護師の認識と行動の変化 -. 日本看護学会論文集 老年看護 41 : 109-112, 2010

Evaluation of Training on Dementia Care and Future Issues

Tomoko Yamasaki, Noriko Ogusu, Takako Kimura

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words: dementia care, nursing staff, general ward

Abstract

A special training day on nursing for patients with dementia (hereafter training) was held in 2012 by this university targeting the nursing staff of our general ward. The aim of the study is to clarify how the participants in the training evaluated it and to examine how to improve the training in the future.

The participants in the study consist of 38 people who participated in the training and gave consent to cooperate for the study. At the end of the training, we asked them to answer a questionnaire and analyzed the results.

The first half of the training was a lecture while the second half involved a case study. The analysis found that all the participants evaluated the lecture as “good,” and case study “meaningful.”

The lecture focused on basic knowledge of dementia, followed by a case study session. As such, it is believed that the training provided an opportunity for the participants to comprehend basics about dementia as well as to reflect on their actual nursing practices, which resulted in their satisfaction.

In the future, we need to design a special training day that will enable the participants to clinically put into practice what they have learned in the training.
